永眠者記念礼拝　　2015年11月1日

説教題「聖徒の交わり」　　前 明治学院教会　岩井健作

聖書　ヨハネの黙示録２１章１節ー四節（新約４７７頁）

「私はまた、新しい天と新しい地を見た。」(21:1)

１、ある方が「母が亡くなってから、もう母は居ないという思いと同時に、今までより母が一層身近に感じられる様になった」といっておられました。そういえば私なども父が亡くなって３２年、私自身が父の死去の年齢を超えましたが、単に「歴史の人」という過去の人ではなく、常に語りかけてくる存在になっています。それだけではなく、今度群馬県に住んで安中教会の礼拝に出ていると、新島襄の人格以来の何代にも渉る群馬に関わる人格の集積を感じます。ここである神学者の言葉を思い出します。

２、「人間の本質は、霊魂というモノでもないし、個別存在でもない。人間の人格とは、関係によって構成される豊かな内容を持つ。人の一生に出会う多くの人々との関わりの集積総体が人格というものである。孤立した人間あるいはキリスト者と言うものはない。キリスト者とは教会という生命体の、交わりを基盤として成立するものである。そこから考えると『生きているものが死んだものを弔い、末永く死者を記念することは、世の習わしであるが、逆に、死者が生きている者を支えている』と言うことはあまり認識されていない。「生と死」「生者と死者」との有機的関係、相互媒介的関係、を考えると、死者の果たしている積極的役割が認識されねばならない。」（大林浩・ラーガスト大教授）

３、今日お読みした聖書はヨハネ黙示録です。キリスト教徒を迫害したローマ帝国の支配者たちの滅亡が幻として描かれています。現実は過酷な「絶望」を引き起こす事態だったと思います。しかし、迫害の苦難のなかで、新しい天地（天上界）の秩序から現世を相対化して、生き抜いたのです。ユダヤ教が苦難のなかで残した遺産だった「黙示文学」（ダニエル書など）という方法で信仰の全うを語ったのが初代教会の信仰です。

４、ここで用いられている「新しい」という言葉に注目したいと思います。ギリシャ語には「新しい」という言葉が二つあります。「ネオス（neos)」と「カイノス(kainos)。用法がそんなに厳密に区別されている訳ではありません。強いてその違いを捉えれば、ネオスは時のながれのあたらしさ、時が経つと古くなります。新しい着物といった意味です。カイノスはネオスとは共存しない別の新しさ。「見よ、私は新しい天と地を創造する」（イザヤ 65:17)のごとく、神による創造の新しさです。出会いの新鮮さです。

５、「聖徒の交わり・・・を信ず」というのは古い使徒信条のなかの一節にある表現です。生者が死者を記念すると同時に、死者が生者を支えているのです。ネオスではなく、カイノスの出会いです。

６、今日永眠者名簿に記されている方々。近年神の御許にまされた、上条実さん、栗崎好一さん、渡辺寛さん、小林あやさん、のことを深く想い起こします。これらの方々は過去の人ではなく、新しい（カイノス）の交わりのうちにあります。私は阪神大震災で多くの親しい方々との死別を経験しました。木原栄二さんは家屋倒壊で、階下にいたお連れ合いと長男道夫君を即死で失われました。助けだされた幼き長女と次女と共に、失意の中にも仮家屋と仮印刷所の仕事場を応急に建て、天上の家族と地上の家族との会話をしながら生き続けました。その対話を『紙の碑』として後出版されました。涙無しには読めない「聖徒の交わり」の記録です。そんななかで私の『地の基震い動く時』（旧版）を出版して下さいました。その後、彼も54才の若さで癌で世を去りました。彼とは私も天上と地上の対話をしつつ「聖徒の交わり」に生きています。